

夕飯のお手伝い

小 六

「今日の夕飯は冷やし中華ちゅうかだよ。」

父が言った。父が野菜を切っている横で、私は卵焼きを作る。一枚目、きれいに焼けたけれど、最後にビリッと破けた。二枚目、今度は油を入れすぎた。三枚目、今度はきれいに焼けた。細く切ってお皿に盛りつける。

「いただきます。」

今日は母が仕事でおそくなる日。そんな日は父が夕飯を作る。母のいない四人での夕飯にももう慣れた。夕飯を食べ終わると、弟がおふろを洗い、父が食器を片付ける。おふろがわいたら、私が妹をおふろに入れる。妹は自分で

かみが洗えないので、私がやってあげる。私たちがねるころ、母が帰ってくる。妹はとたんに、

「ママがいいー。」

と言って母といっしょにしん室に行く。

お手伝いは、正直に言って少し面どうくさい。テレビを観たり、遊んだりしたいのに……と思うときがある。母が仕事をしないで家にいたときは、家事はほとんど母がやっていたから楽だった。学校から帰ると母が居て、おやつを食べてからすぐに友達と遊びに行けたし、食事の手伝いもほとんどやったことがなかった。

新潟の祖父母の家に行ったとき、家事はほとんど祖母がやっていて、父は居間で新聞を読んだり、テレビを観たりしていた。父も子供のころはほと

んど家事の手伝いをしなかったそうだ。というのも昔は「男が外で働き、女が家事や育児をする」が「当たり前」だったからだ。

でも、私はこの考えは間違っていると思う。私は将来やりたい仕事がある。でも、私が大人になったときに、「女だから」という理由で働けなかったり、仕事を辞めたりするのはいやだ。同じように、「男だから」という理由で、絶対に外で働かないといけないのも変だと思う。今は女の人もいろいろな仕事をしているし、私の周りにも働く女の人がたくさんいる。男の人も家事や育児をするようになってきているし、学校や保育園のむかえにお父さんが来ている子もいる。私はよいことだと思う。けれど、「男は〇〇、女は〇〇」とい

う考えは、まだまだ残っていると思う。この前、クラスの男子が、「男がそんな本を読むなんて、おかしい。」

と友達にからかわれているのを見かけた。言われた子は特に気にしている様子はないけれど、私は本に男用、女用なんてないと思う。私の好きなマンガも「少年マンガ」だ。けれど、だからといってからかわれるのはいやだ。他にもこんなことがあった。帰り道、女子四人と男子一人で帰っていたら、他の男子から、「女の中に男が一人いる。」と言われていた。その子はふざけて笑っていたけれど、私は帰る方向が同じなんだから、別にいいと思った。男や女ということだけではなくて、

外国人だから、障害があるから、お金
が無いから、見た目が違うからという
理由だけでいろいろ言われたり、され
たりしていやな思いをしている人がま
だまだたくさんいると思う。

続けていきたい。

「差別はいけない」という法律はど
んどん新しいものがつくられている。
でも、本当に差別を無くすには、一人
一人が「何か変だな」ということに気
付くことがまず大切だと思う。そして、
少しずつでも「それって変」と声をあ
げること、今の「当たり前」を変え
ることができると思う。

私も「何か変だな」と思ったときは、
声をあげられるようになりたい。そし
て、傷ついている人がいたら、「だい
じょうぶ」と寄りそえるようにしたい。
母や父の手伝いを面どうくさがらずに